

人概念の原初性と人の同一性

氏名 鹿野 祐介 (Yusuke Shikano)

所属 東北大学大学院文学研究科

ピーター・ストローソンは、「記述的形而上学」を標榜するその著書『*Individuals*』において、デカルト以来の問題となってきた心身関係を理解可能な仕方では提示するために、人 (person) 概念の原初性 (primitiveness) テーゼを提起した。このテーゼでは、人の概念とは、意識状態を帰属させる P-述語と身体的特徴を帰属させる M-述語の両方がともに適用可能であるような存在者のタイプの概念であり、また、このような意味での人の概念が心と身体という二つの概念によって分析されるべきではないと論じられる。

これまで、ウィリアムズを筆頭に、多くの論者がストローソンによる人概念の原初性テーゼを巡る一連の議論に対し批判的検討を行ってきた。それら批判の多くは、ストローソンによる人概念の特徴付け、P-述語・M-述語の区別やその適用条件、意識状態の自己帰属および他者帰属の説明に向けられている。

本発表では、先行する批判がその対象とする、ストローソンによる人概念の原初性テーゼを巡る議論よりもむしろ、ストローソンがこのテーゼにより人の同一性における問題を幾分無害なものへと解消できるとみなしていたことに焦点を当てる。「[人概念の原初性] テーゼが明確に理解されず、承認されないうちは、[人を再同定する (reidentification) 基準に関する哲学的] 問いへのいかなる試みも成功しないだろう。そして、ひとたびそれが理解され、承認されれば、人の同一性に残る問題は...比較的重要ではなく、比較的困難のないものとなるように見える。」(*Individuals* (1959) pp. 132–3.)

ストローソンはここで、人概念の原初性テーゼの承認なしには、ある人を再び同じ人として同定する再同定の基準は与えられえないと述べているが、若干の付言を除いて、これ以上多くを語っているわけではない。そこで本発表では、人概念の原初性テーゼの承認が人の再同定の基準として何を提示し、人の同一性の諸問題を無害化するかという問いを立て、次の手順で論を展開する。まず、同定 (identification)、帰属 (ascription) などの概念を導入し、人 (person) の再同定という事態を説明する。続いて、人概念の原初性テーゼと同定・再同定についての説明から、人を再同定するための基準が、身体でも心でもなく、人 (person) であるという見解を導き、ストローソンに帰する。そして、人の同一性にまつわる諸問題に対して、ストローソンの見解が貢献を果たす諸側面を明らかにする一方で、同定・再同定と帰属の間にはなおも説明を要する若干の間隙が残ることを示す。